

仙台市文化財調査報告書第162集

仙台平野の遺跡群 XI

— 平成 3 年度発掘調査報告書 —

1992年3月

仙 台 市 教 育 委 員 会

仙台市文化財調査報告書第162集

仙台平野の遺跡群 XI

—平成3年度発掘調査報告書—

1992年3月

仙台市教育委員会

序 文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」調査に着手したのは昭和56年でした。この事業も数えて11年月を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は山田糸里遺構、富沢遺跡、郡山遺跡、さらに郡山遺跡の隣接地である長町貨物ヤード跡地において、造構確認調査を実施し、本報告書はそれをまとめたものであります。

本市は平成元年4月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。またそれに伴い民間の小規模開発も増加し、発掘調査量も漸増傾向にあります。

本市教育委員会では先人の創造した歴史と文化遺産を次代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っております。しかしこうした文化財の保護活用は、市民の方々や有識者の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

仙台市も、政令指定都市となり2年が過ぎようとしています。これからはもっと広い視野に立って充実した遺跡保護を行っていくために、教育委員会が先頭に立って調整、努力することを誓うものであります。日々の変化が激しい昨今ですが、精一杯努力してまいる所存ですので、今後とも、御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶といたします。

平成4年3月

仙台市教育委員会

教育長 東海林 恒英

例 言

1. 本書は平成3年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。
2. 本書中の土色については「新版標準土色帖」(小山・佐原:1973)を使用した。
3. 本書中で使用した地形図は建設省国土地理院発行の2万5千分の1「仙台南西部」・5万分の1「仙台」の一部である。
4. 実測図中の水系高は標高で示してある。
5. 実測図、本文中の方位は山田条里遺構が真北を、長町貨物ヤード跡地が磁北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20'である。
6. 本書の作成・編集は、木村浩二、渡部弘美、長島榮一、五十嵐康洋、稲葉俊一、川名秀一が行ない、執筆者は文末に記した。
7. 遺構略号を次の通りとした。

S A	材木列	S B	建物跡	S D	溝跡
S I	住居跡	S K	土坑	S X	性格不明遺構
8. 本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会で保管している。
9. 今年度の事業は平成3年4月に着手し、平成4年3月に終了した。

本文目次

序文

例言

I. 調査計画と実績	1
II. 発掘調査報告	5
〔1〕 山田条里遺構略報	5
1. 位置と環境	5
2. 調査経過	6
3. 調査内容	6
4. まとめ	11
〔2〕 富沢遺跡第76次調査	17
1. 位置と環境	17
2. 調査経過	18
3. 調査の方法	19
4. 基本層序	19
5. 検出遺構と出土遺物	19
6. まとめ	20
〔3〕 長町貨物ヤード跡地	23
1. 位置と環境	23
2. 調査経過	27
3. 調査内容	28
4. まとめ	39
〔4〕 郡山遺跡	43
1. 位置と環境	43
2. 調査概要	43

挿図目次

第1図 仙台市内の主な文化財	3	第4図 20トレンチ×505~509地点断面	9
第2図 周辺の遺跡	5	第5図 20トレンチ3a、3b 水田跡	12
第3図 山田条里遺構全体図	7	第6図 SK3、4土坑、SD1溝跡	13

第7図 調査区位置図・設定図	17	第16図 E-3トレンチ平面図	32
第8図 周辺の遺跡	18	第17図 E-4トレンチ平面図	33
第9図 基本層序	19	第18図 E-8トレンチ平面図	33
第10図 長町貨物ヤード跡地位置図	23	第19図 C-2トレンチ平面図	34
第11図 明治40年頃の長町、郡山周辺	25・26	第20図 C-3トレンチ平面図	35
第12図 国鉄清算事業団所有地位置図	27	第21図 E-3トレンチ出土石器	35
第13図 調査区配置図	29	第22図 出土遺物	36
第14図 土層柱状図	30	第23図 C-4, W-4, 8平、断面図	37・38
第15図 調査区断面柱状図	31	第24図 郡山遺跡調査区位置図	44

写 真 目 次

写真1 遺跡周辺航空写真(1987年)	14	写真10 基本層序	20
写真2 遺跡周辺航空写真(1956年)	14	写真11 E-3トレンチ(南より)	40
写真3 20トレンチX513地点東壁断面	14	写真12 E-3トレンチ溝跡(南より)	40
写真4 20トレンチX600~606地点	15	写真13 E-8トレンチ(西より)	40
2層水田跡(北から)		写真14 C-2トレンチ(北より)	41
写真5 11トレンチ3層面	15	写真15 C-3トレンチ(西より)	41
擬似畦畔(南から)		写真16 C-4トレンチ(東より)	41
写真6 20トレンチX502~518地点	15	写真17 C-4トレンチ(北西より)	42
3a層水田跡(南から)		写真18 W-4トレンチ(北より)	42
写真7 20トレンチX502~518地点	16	写真19 W-8トレンチ(西より)	42
3b層水田跡(南から)			
写真8 20トレンチX507地点	16		
S K 3土坑(東から)			
写真9 20トレンチX623~643地点	16		
S D 1溝跡(北から)			

表 目 次

第1表 調査実績表	1	第2表 仙台市内の主な文化財	2
-----------	---	----------------	---

I. 調査計画と実績

現在の仙台市における周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の数は、680箇所に達している。これらの遺跡は、その一つ一つが先人の残した貴重な文化遺産であり、先人の歴史と当時の具体的な生活の様子とを現代に伝えるものである。われわれは、これらの文化遺産をわれわれの世代で消滅させることなく、次の世代へと継承していくべき責務を担っている。しかし、周辺市町との合併や政令指定都市に指定されて以降、都市化に拍車がかかり、これらの遺跡の中には破壊の危機にさらされているものも数多いのが現状である。

当市教育委員会では、これらの遺跡の範囲と性格の究明のため、昭和56年度より国の補助を受けて「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。11年目をむかえた今年度は、山田条里遺跡、宮沢遺跡、長町貨物ヤード跡地、郡山遺跡での発掘調査を実施した。

今年度の発掘調査計画と実績は以下の通りである。

1. 目的 仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査

2. 調査面積 2,464m²

3. 調査期間 平成3年4月～12月

4. 調査体制

調査主体 仙台市教育委員会

調査担当 仙台市教育委員会文化財課

課長 早坂 春一

調査第一係 係長 加藤正範 主任 木村浩二 主事 長島榮一

教諭 稲葉 俊一

調査第二係 係長 出中則和 主事 渡部弘美 教諭 五十嵐康洋

教諭 川名秀一

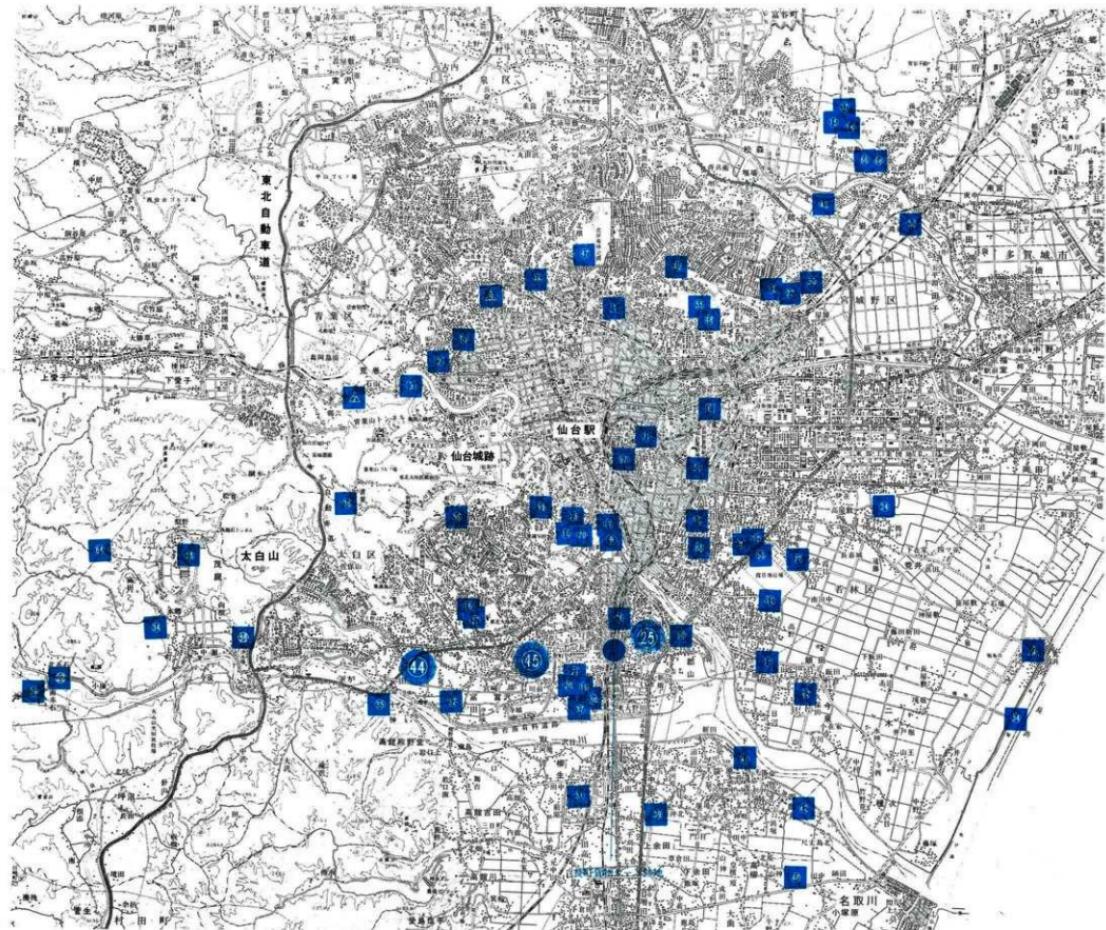
管理係 係長 鶴田義幸 主事 佐藤正行

調査地	所在地	申告者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
山田条里遺跡	太白区 山田字大石地	山田町取土地改良組 理事長 棚原 勝	農村基盤総合整備事業	80,000m ²	1,100m ²	平成3年9月13日～12月17日
宮沢遺跡	太白区長町 七丁目24の48	太白区宮澤八丁目山の上 仲藤 春男	共同住宅建築	94m ²	13m ²	平成3年7月15日～7月29日
長町貨物ヤード跡地	太白区長町 六丁目地内	仙台市水守委員会 教育長 東海林信義	試掘予備調査	40,000m ²	700m ²	平成3年7月24日～10月16日
郡山(第90次)	太白区郡山一 四丁目地内	仙台市水道事業部管理課 伊藤 勉	水道管埋設工事	643m ²	643m ²	平成3年4月11日～5月11日
道跡(第92次)	太白区郡山 六丁目213	明治地主改築開発 公社理事長 藤谷貞一郎	共同住宅建築	805m ²	8m ²	平成3年9月3～4日

第1表 調査実績表

No	名 称	種 別	仙台市文化財 表示番号	No	名 称	種 別	仙台市文化財 表示番号
1	東 照 宮	神 社	A-002	37	伊 古 田 遺 跡	集 落	C-196
2	大崎八幡神社	*	A-003	38	六 反 田 遺 跡	*	C-197
3	三居沢発電所	建 造 物	A-048	39	後 河 原 遺 跡	水 田	C-208
4	蒲生荒浜海岸 鳥類観察地	自然 環 境	B-004	40	昭 和 北 遺 跡	集 落	C-210
5	輪 王 寺 庭 園	庭 園	B-012	41	中 田 順 中 遺 跡	*	C-211
6	苦竹のいちょう	樹 木	B-101	42	戸 ノ 内 I 遺 跡	*	C-213
7	広瀬川のカジカガエル	自然 環 境	B-122	43	岩 切 烟 中 遺 跡	*	C-221
8	遠見塚 古 墳	古 墓	C-001	44	山 田 条 里 遺 構	水 田	C-294
9	兜 塚 古 墳	*	C-002	45	富 沢 遺 跡	旧石器・水田	C-301
10	法 須 塚 古 墳	*	C-003	46	提 町 瓦 窯 跡	窯 跡	C-401
11	弁 天 園 古 墳	*	C-011	47	五 本 松 窯 跡	*	C-403
12	善 志 寺 横 穴 群	横 穴 古 墓	C-027	48	神 明 社 窟 跡 A	*	C-408
13	愛 宝 山 横 穴 群 B.C地点	*	C-028 B, C	49	安 善 寺 中国瓦窯跡	*	C-410
14	台 里 敷 横 穴 群	*	C-029	50	大 連 寺 窑 跡	*	C-415
15	入 生 汗 横 穴 群	*	C-030	51	陸 奥 国 分 寺 跡	寺 院	C-419
16	土 手 内 横 穴 群	*	C-031	52	陸 奥 国 分 尼 寺 跡	*	C-420
17	京 振 寺 横 穴 群	*	C-033	53	仙 台 東 郊 条 理 跡	水 田	C-421
18	大 年 寺 山 横 穴 群	*	C-034	54	貞 山 振 遺 跡	河	C-426
19	王 の 墓 古 墓	古 墓	C-038	55	桥 江 遺 跡	窯 跡	C-433
20	春 日 社 古 墓	*	C-039	56	仙 台 城 跡	城 跡	C-501
21	大 野 田 古 墓 群	*	C-054	57	高 森 城 跡	*	C-502
22	燕 汗 遺 跡	官 衛・寺 院	C-101	58	茂 麻 東 遺 跡	*	C-503
23	南 小 泉 遺 跡	集 落	C-102	59	茂 ヶ 峠 城 跡	*	C-504
24	藤 田 新 出 跡	*	C-103	60	北 目 城 跡	*	C-505
25	郡 山 遺 跡	官 衛	C-104	61	沖 野 城 跡	*	C-506
26	西 台 烟 遺 跡	幕 城	C-105	62	今 素 遺 跡	*	C-507
27	三 神 峰 遺 跡	集 落	C-106	63	若 林 城 跡	*	C-510
28	川 添 東 遺 跡	*	C-121	64	茂 麻 大 館	*	C-517
29	大 貝 中 遺 跡	*	C-122	65	林 子 平 の 墓	墓	C-601
30	鷦 乃 巣 遺 跡	*	C-135	66	東 光 寺 磨 崖 仏	磨 崖 仏	C-602
31	栗 遺 跡	*	C-136	67	伊 蔵 七 十 郎 墓	墓	C-650
32	船 渡 前 渡 跡 (八幡西遺跡)	*	C-148	68	東 光 寺 古 碑 群	古 墓	C-681
33	梨 野 A 遺 跡	*	C-180	69	経 ケ 峰 伊 達 家 墓	墓	C-604
34	門 野 山 囲 遺 跡	*	C-182	70	茂 ヶ 峠 伊 達 家 墓	*	C-605
35	山 田 上 ノ 台 遺 跡	*	C-193	71	淨 観 院 三 沢 初 子 の 墓	*	C-607
36	青 葉 山 遺 跡	*	C-194	72	谷 風 の 墓	*	C-644

第2表 仙台市内の主な文化財



第1図 仙台市内の主な文化財

II. 発掘調査報告

[1] 山田条里遺構略報

1. 位置と環境

山田条里遺構は仙台市の南西部、太白区山田・鉤取地内に所在する。北側は青葉山丘陵が西から東へ向かって延び、南側には名取川を挟んで高館丘陵が位置している。本遺跡はこの青葉山丘陵と高館丘陵の間にひろがる標高24~40mの「名取川台地(山田面)」と称される河岸段丘の東端部に位置する。更に遺跡部分は名取川に流れ込む支流の影響を受けた平坦な扇状地(30~38m)にあり、基盤となる段丘礫層上には粘土混じりの砂・シルトが堆積している。遺跡の範囲は約66万m²にも及び、現在は水田地帯となっている。

仙台市南西部の名取川北岸地城は、本遺跡をはじめ各時代の遺跡が分布している所である。以下各時代ごとに周辺の遺跡を概観する。旧石器時代の遺跡は、青葉山丘陵から南に張り出した西方の小丘端部に山田上ノ台遺跡、北前遺跡がある。縄文時代になると、西から人来田遺跡、山田上ノ台遺跡、北前遺跡、上野遺跡などがあり、北東の青葉山丘陵小支丘には三神峯遺跡がある。また東の富沢地区の自然堤防上には山口遺跡、下ノ内遺跡、六反田遺跡、下ノ内浦



第2図 周辺の遺跡

遺跡、伊古田遺跡が存在する。弥生時代のものとしては東方の富沢遺跡で水田跡が発見されているほか、南側に船渡前遺跡がある。古墳時代の遺跡としては丘陵頂・裾部に三神峯、裏町古墳などが北東部に展開し、荒川を挟む富沢・大野田地区の自然堤防上には教塚古墳、春日社古墳、王ノ壇古墳などが知られている。奈良・平安時代のものは、前述の富沢・大野田地区の自然堤防上に立地する山口遺跡や六反田遺跡などで集落が確認されているほか、富沢遺跡では水田跡が発見されている。また東側には鍛治屋敷A・B遺跡、八幡西遺跡などがある。中世では東方に戦国時代の富沢館跡がある。

2. 調査経過

山田条里遺構が位置する山田・鉤取地区周辺は近年来急速に開発が進み、宅地化等によって周辺環境が変貌しつつある。この中にあって当遺跡は、水田地帯として古来からの景観を残している数少ない地域であった。特に、一辺約110mを計る整然と区画された土地割が東西400m・南北500m程の範囲にみられ、条里制に起因する土地割と考えられてきた。

当地区では上述した都市化への変容と共に都市近郊農業の確立のため、当遺跡のほぼ全域を包括する農村基盤総合整備事業の計画が進められてきている。景観面からみても完全なる破壊が生じるため、仙台市教育委員会では関係機関との協議を行い、地区全体の詳細な地形図の作成・水路部分を中心とした調査・条里制遺構とする積極的確証を得るために事前の記録保存となる発掘調査を実施することとし、工事に関しては地下遺構の破壊を最小限に止どめる工法の指導を行った。調査は事業との関連から3ヶ年にわたり、平成元年度が初年度となる。

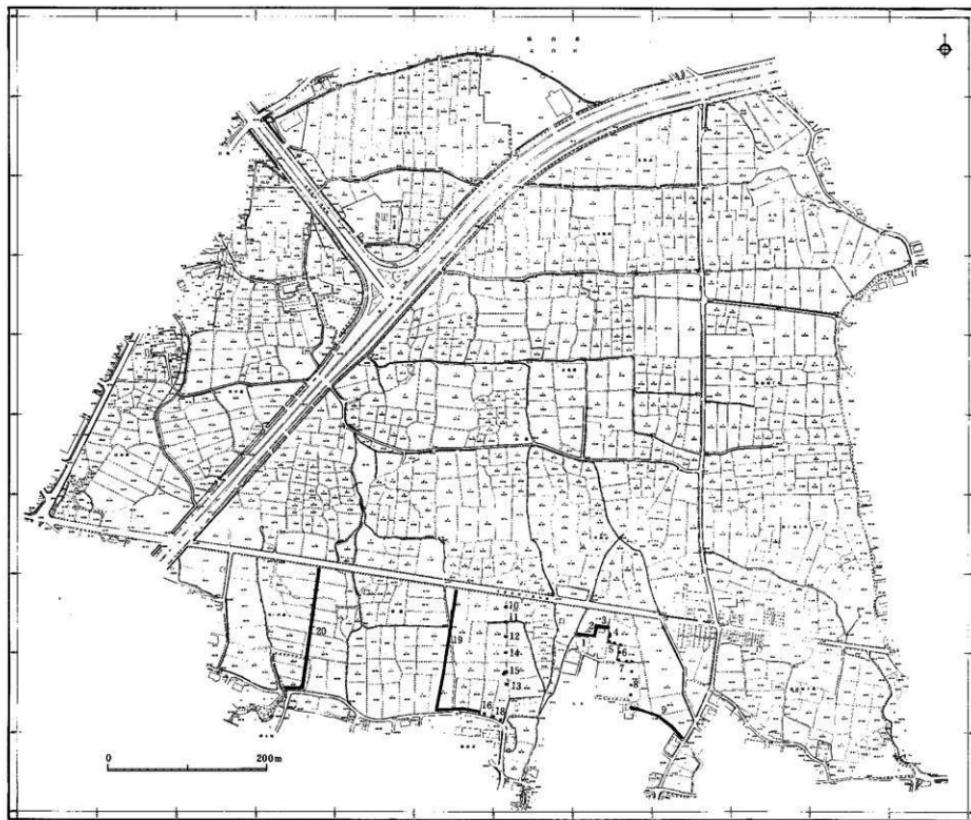
元年度の調査は遺跡東側部の約10haを対象地域とし、水路部分約3000m²の調査を実施した。平安時代の水田跡・水路跡・溝跡・土坑等が確認され、各種の遺物が出土している。2年度は遺跡中央部を中心とする約19.3haを対象地域とし、約3700m²の調査を実施した。近世頃の掘立柱建物跡・堀跡、平安時代の水田跡、縄文時代の炉跡・陥し穴等が確認され、多くの遺物が出土している。最終年度となる今年度の調査は遺跡南端部約8haを対象地域とし、9月13日より調査を開始した。

3. 調査内容

(1) 調査区の設定

調査区として水路予定地部分（1～9・16～20トレンチ）と遺構の広がり及び遺跡の性格把握のための小トレンチ（10～15トレンチ）を設定した。水路部分は幅2.5mの長大なトレンチとなり、小トレンチは4×2mを基本としている。基準線は国家座標を基にした基準杭で対処している。調査は西側部から東側へ進めていった。現況は8トレンチが荒地で他はすべて水田である。基本的な層序は各トレンチで若干の相違はあるが、統一的な把握は可能である。

1～9トレンチでは大別して3枚の層を確認したが、耕作土直下が基本層の4層及び5層と



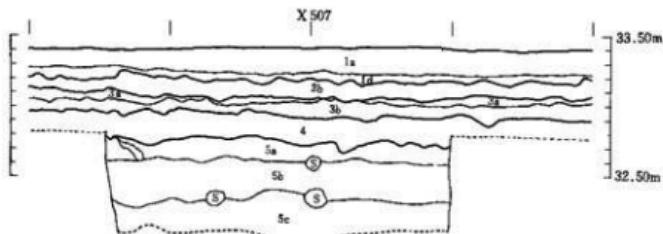
第3図 山田条里遺構全体図

なる。1～3トレンチでは4層で縄文土器片・倒木痕跡1基を検出したのみである。4～9トレンチは開田に伴う削平及び盛土を受け遺存状態が不良で一部調査を割愛している所がある。4トレンチで時期不明の土坑を1基確認している。

10～15トレンチは現代畦畔の直下の状況確認のため、6本のトレンチを100mの範囲に任意に設定したものである。層は人別して5層確認され、10～13トレンチでは基本層の3層が確認され、11トレンチでは真北に延びる擬似畦畔が1条認められた。15トレンチでは北西～南東方向に延びる河川跡が1条みられる。

19トレンチは全体的に遺存状況が悪く、特に南側では1層直下で礫層となり調査を省略又は割愛した地点がある。3層を除く各基本層が確認されているが1層が厚く分布する。遺構には2層面の水田跡、土坑1基、河川跡1条がある。遺物として土師器・縄文土器片が若干量みられ、「朝鮮通宝」が1枚出土している。

20トレンチの北側部は調査区内で標高値が最も高い地点にあたり、1～5層の基本層が連続して認められ、遺存状況が良好であった。トレンチ端部の比高差が160cm程あり、南側へ向かうにつれて1・2層が厚く分布する。遺構として2・3a・3b層の水田跡、土坑2基、溝跡1条、倒木痕跡を確認している。



層	土色	土性	備考
1a	褐色	10YR 4/2 砂質シルト	下部、酸化鉄集積層見られる（現代作土）
1d	黄褐色	2.5Y 4/2 粘土	マンガン粒を含む
2b	にぼい黄褐色	10YR 4/2 粘土	マンガン粒を含む
3a	灰黃褐色	10YR 4/2 砂質粘土	灰白色火山灰、層中に多く見られる
3b	灰黃褐色	10YR 4/2 砂質粘土	層上部に灰白色火山灰を含み、マンガン粒を含む
4	黒色	7.5YR 4/2 砂質粘土	炭化物、小礫、少量の土器片（縄文土器）を含む
5a	黒褐色	7.5YR 4/2 砂質粘土	酸化鉄を含む
5b	黒褐色	7.5YR 4/2 砂	酸化鉄を含む
5c	オリーブ黒	5Y 4/2 砂	礫石、粗石、礫（3～4cm）の層

第4図 20トレンチX 505～509地点断面

(2) 基本層序

調査区が広範囲にわたるため層序等若干の違いはみられるが、水田地域では大別して5枚の層を確認している。1層はa～dに細別され、酸化鉄の集積がみられる。1a層が現代の作土となる。2層はa・bに細別される。色調は黄褐色系で2a層が砂質粘土、2b層が粘土である。3層はa・b・cに細別した。色調は灰黄褐色を呈する。3a・3b層は砂質粘土で層中は灰白色火山灰がブロック状に含まれる。3c層は砂である。3a・3b層の両面で水田跡を確認している。4層は黒色の砂質粘土層で、下部につれて礫を多く含むようになる。少量ではあるが縄文土器片・石器を包含している。5層が段丘堆積物上部となる層でa・b・cに細別した。下部につれて砂になり、5c層では礫が主体となる。

(3) 検出遺構

検出遺構として水田跡・土坑・溝跡・河川跡・倒木痕跡がある。出土遺物は整理箱一箱にも満たないが、陶器・磁器・土師器・須恵器・縄文土器・石器・金属製品等がある。ここでは検出された遺構を中心に概略のみの記述にとどめる。

水田跡=2層及び3層で確認している。2層水田跡は19・20トレンチで確認されたが、検出面は4層及び5層で作土面のみの確認となっている。層中には陶器・磁器・土師器片が少量化されている。3層水田跡は20トレンチ北端部、3a及び3b層の両面で畦畔を確認した。すべて土盛畦畔である。調査区の制約から区画の判明するものはないが、方形を基調とするものと判断される。水口・水路等の施設は確認されなかった。3層中には灰白色火山灰・ロクロ使用の土師器が含まれ、水田跡の所属時期は平安時代と考えられる。

3a層水出跡-X 502～518地点で3条の畦畔を確認している。層厚は1～12cmで上層の削平が著しい。畦畔1は確認長220cm、上端幅30～58cm、下端幅58～72cmを計る。軸方向はN-85°-Eである。田面からの高さは0.4～3.2cmである。畦畔2は畦畔3とT字型にはば直交し、N-5°-Eの方向を指す。確認長は280cm、上端幅20～50cm、下端幅60～90cmを計る。高さは0.1～4.5cmを計る。畦畔3は確認長190cm、上端幅30～40cm、下端幅64～90cm、高さは1.8～4.8cmを計る。軸方向はE-5°-Sで畦畔1とほぼ平行関係にある。田面の標高は33.15～32.95mで緩やかに南へ傾斜をみる。若干量ではあるがロクロ使用の土師器が出土している。

3b層水田跡-X 502～518地点で4条の畦畔を確認している。3a層水出跡とほぼ同地点に存在するが、畦畔方向に若干の相違がみられる。畦畔1は確認長250cm、上端幅36～74cm、下端幅78～114cmを計り、高さは1～4cmである。軸方向はN-84°-Eである。畦畔2は北側ラインが確認されず段状になっている。確認長190cm、高さ1～3cmを計る。方向はN-55°-Eである。畦畔3は畦畔2とほぼ直交し接続している。確認長380cm、上端幅8～36cm、下端幅30～70cm、高さ1.1～3.5cmを計る。方向はE-63°-Sである。畦畔4は確認長280cm、上

端幅24~60cm、下端幅70~100cm、高さ1.7~4.3cmを計る。方向はE-39°-Sである。田面の標高は33.1~32.8mで南側へ傾斜している。

土坑=5基確認している。形態はすべて円形を基調とする。出土遺物も少なく性格は不明である。1層下而での確認であり、所属時期は近世以降かと考えられる。

S K 4 土坑-19トレンチ・X 653地点に位置する。東西軸で約2m、南北軸で約1.8mを計り、平面形はほぼ円形を呈する。壁はほぼ垂直に立ち上がり、高さ約55cmを計る。底面はほぼ平坦である。堆積土は1層で磁器片が1点出土したのみである。

溝跡=一条(SD 1溝跡)のみの確認で、20トレンチ・X 623~643地点に位置する。4層上面での確認で、ゆるやかにS字状に蛇行している。幅は40~90cm、深さ15~20cmを計る。断面形は逆台形・皿状を呈し、堆積土は2層確認している。出土遺物はなく、性格は不明である。

河川跡=15トレンチ・19トレンチX 575地点で計2条(SR 1・SR 2河川跡)確認している。SR 1は対岸が不明であるが北西-南東の方向を向く。堆積土は5層認められ下部で灰白色火山灰がブロック状に含まれる。SR 2は直線状に延び確認長は約13m、幅は約2.5mを計る。北東-南西の方向を向き、北東へ低くなっている。出土遺物としては両河川の底面から植物遺体が確認されたのみである。

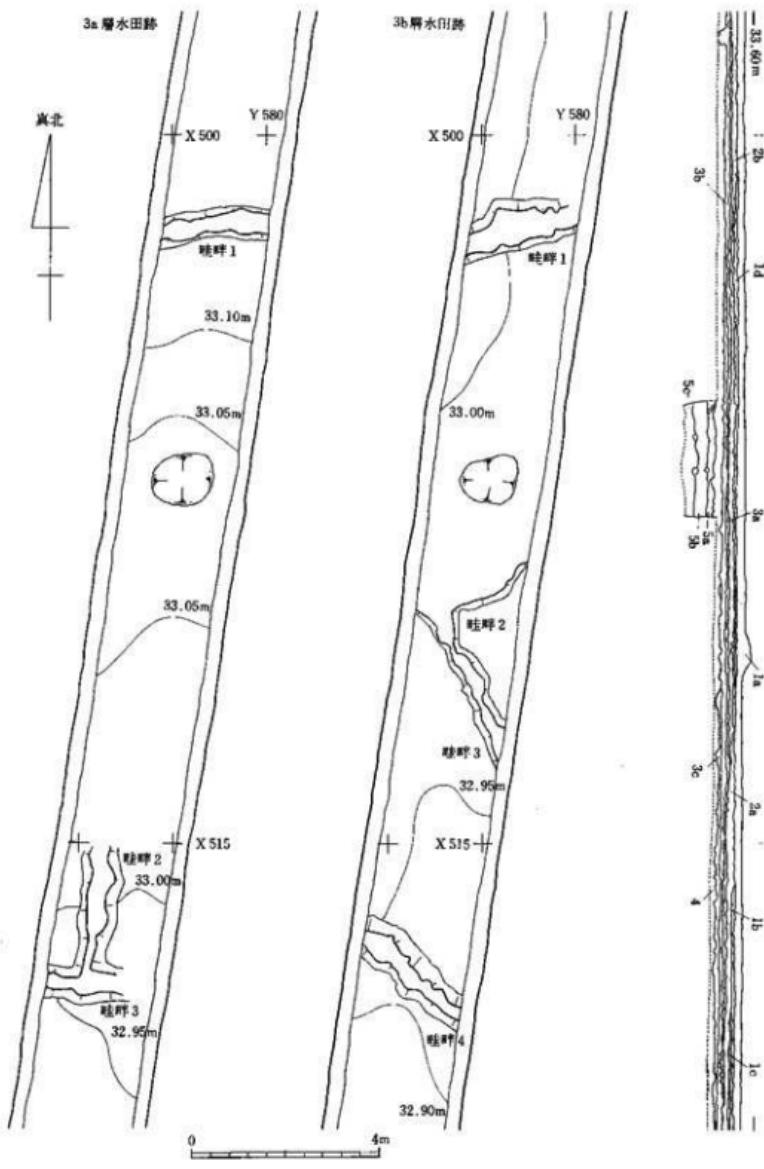
4.まとめ

農村基盤総合整備事業に伴う山田条里遺構の発掘調査は平成元年度から3ヶ年3次にわたり、総面積約7500m²の調査を実施した。成果として縄文時代から近世にいたる数多くの遺構・遺物が発見されている。ここでは概略を記しまとめとする。

縄文時代では炉跡・陥し穴と考えられる土坑が検出され、縄文中期~後期頃の土器・石器が出土している。周辺には山田上ノ台・上野遺跡が位置しており、生活の場としてのありかたが窺える。当遺跡南側の下位段丘面には弥生時代の土器を出土する般渡前遺跡が存在するが、今年度の調査でも当時期に関するものは確認されず、古墳及び奈良時代も同様に何ら確認されなかった。平安時代の遺構としては水田跡(畦畔・水路)・土坑を検出している。畦畔は真北を向くものもみられるが、地形的要因からか様々である。水田作上中には灰白色火山灰・ロクロ使用の土師器が含まれ、10世紀代の年代を考えられる。水田跡は広範囲にわたる地点での検出で、線的なものとなっており詳細は不明である。近世以降のものとしては水田跡・堀跡・建物跡・土坑がある。水田跡は現代の耕作によって遺存がわるく不明な点が多い。堀跡及び建物跡は江戸時代に作成された絵図に描かれており、それぞれ屋敷の堀跡・神社跡と判断されるものである。土坑はほとんどが円形のもので性格は不明である。

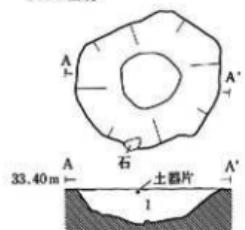
以上が確認された遺構・遺物の概略であるが、当遺跡の主体となるものは平安時代の水田跡である。当時期以前の水田跡の存在も追及したが、出土遺物・土層から平安時代が下限と判断される。尚、条里制の問題は本格的整理に待ちたい。

(渡部弘美・川名秀一)



第5図 20トレンチ 3a・3b 層水田跡

SK 3 土坑

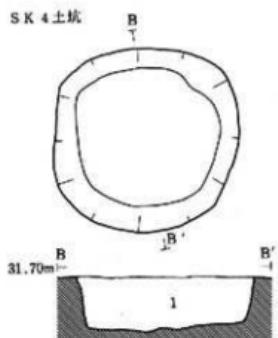


1. 黄灰色 2.5Y 5/4 砂質シルト 黒色土をまばらに含む

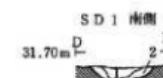


1. 灰黄褐色 10Y R 5/4 砂質シルト

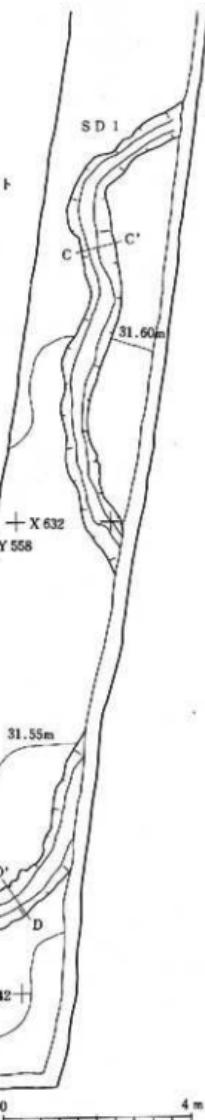
SK 4 土坑



1. 黑褐色 2.5Y 3/4 砂質シルト 小木片少量を含む



1. 灰黄褐色 10Y R 5/4 砂質シルト
2. 灰黄褐色 10Y R 5/4 砂 細砂



第6図 SK 3・4 土坑・SD 1 溝跡

写真 1
遺跡周辺航空写真
1987年



写真 2
遺跡周辺航空写真
1956年



写真 3
20トレンチ X 513地点
東壁断面

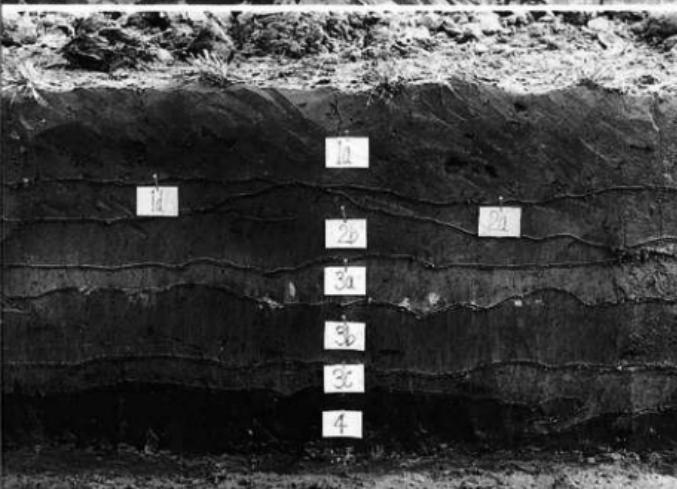


写真4
20トレンチ X600～
606地点
2層水田跡(北から)



写真5
11トレンチ 3層面
擬似畦畔(南から)

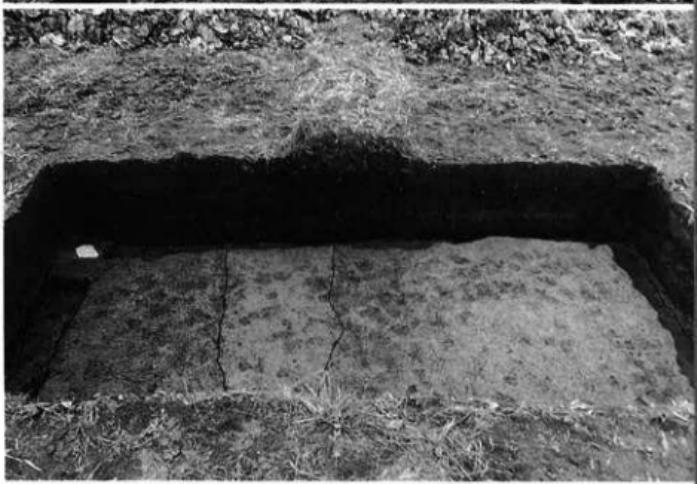


写真6
20トレンチ X502～
518地点
3a層水田跡(南から)



写真 7
20トレンチ X502～
518地点
3b層水田跡(南から)

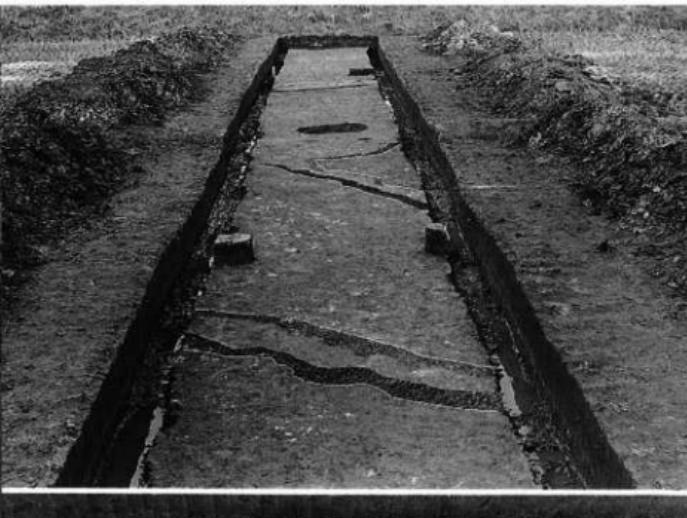


写真 8
20トレンチ X507地点
SK 3 土坑(東から)

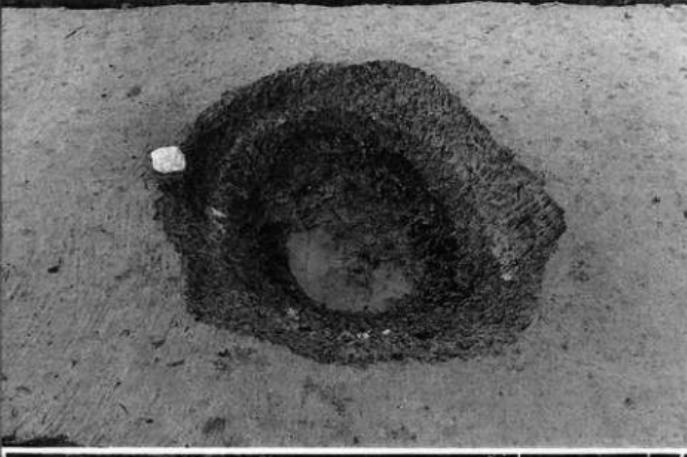


写真 9
20トレンチ X623～
643地点
SD 1溝跡(北から)



[2] 富沢遺跡第76次調査

1. 位置と環境

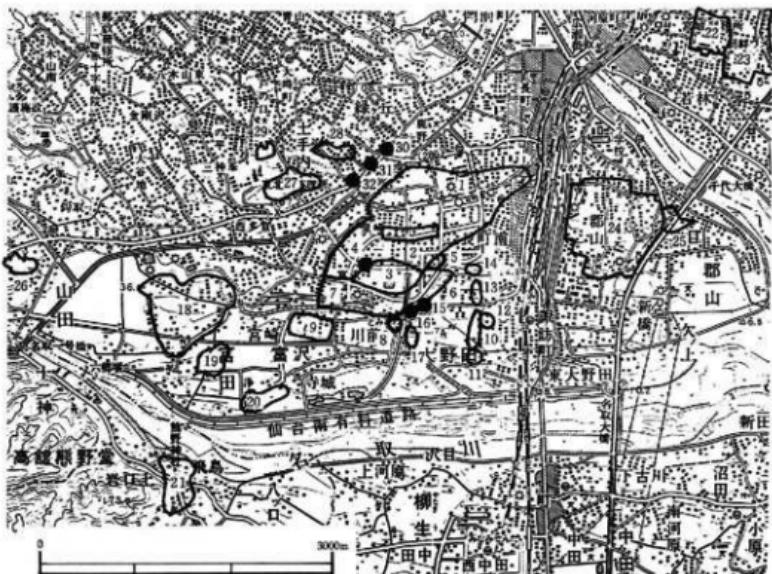
富沢遺跡は、宮城県仙台市南東部、太白区富沢にあり、総面積約90haにも及ぶ広大な遺跡である。その大部分は、広瀬川と名取川に挟まれた沖積平野—郡山低地—の後背湿地に位置している。高速鉄道の開通により開発が一段と進み、宅地化、商業地化が著しい。

この地域には丘陵、段丘、河川、自然堤防、後背湿地といった地形が展開し、人々の生活と密接な関係をもつてきており歴史的には、旧石器時代から近世に至までの数多くの遺跡が周辺に分布している。旧石器時代の遺跡では名取川左岸の台ノ原あるいは上町段丘上に立地する山田上ノ台遺跡と北前遺跡とがあり、前期および後期旧石器時代の遺物を出土している。縄文時代の遺跡は、段丘上に立地する山田上ノ台遺跡、北前遺跡、三神峯遺跡、上野遺跡や自然堤防上に立地する六反田遺跡や下ノ内遺跡がある。弥生時代以降では、自然堤防上に立地する、南小泉遺跡、郡山遺跡、西台畠遺跡などがある。

今回調査を行なった、富沢遺跡では、昭和57年の高速鉄道建設に伴う調査の開始以来10年にわたって調査が続けられており、後期旧石器時代の人々の生活の一端がうかがわれるような遺構が検出されている。また、弥生時代以降の水田跡が各地点で検出され、この地域での土地の利用のされ方が分かってきている。中世になると、遺跡の東側の微高地で居住域、その西側では、水田跡が検出され生産域と居住域の広がりが分かってきている。



第7図 調査区位置図・設定図



No.	遺跡名	立地	時代	No.	遺跡名	立地	時代
1	富沢遺跡	後背湿地	昭和(後期)～明治(前期)・古墳時代	17	五反田木造塗	自然遺跡	古墳
2	魚崎塚	自然遺跡・後背湿地	縄文(後期)・弥生・古墳・平安	18	上野段丘	绳文(中期)・奈良・平安	
3	下ノ内溝	自然遺跡	縄文(早期・後期)・弥生・古墳・平安	19	舟ノ内	自然遺跡・溝背湿地	弥生・平安
4	敷原古墳	後背湿地	古墳	20	六手松	自然遺跡	奈良・平安
5	笠原	自然遺跡	古墳・平安	21	猿野馬路	丘陵	中世
6	六反田	自然遺跡	縄文(中期後期・後期)・弥生・古墳・奈良・平安	22	春林城跡	自然遺跡	古墳・平安・飛鳥～江戸
7	山口	自然遺跡・後背湿地	縄文(後期・後期・前期)・弥生・古墳・平安・巾着	23	市小舟	自然遺跡・後背湿地	弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
8	下ノ内	自然遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	24	船山	自然遺跡	自然遺跡
9	富沢壁跡	自然遺跡・後背湿地	戰国時代	25	北日城跡	自然遺跡	近世・江戸
10	玉ノ城	自然遺跡	縄文(後期)・弥生・山麓・奈良・中世・近世	26	山田上ノ台	段丘	
11	黒瀬敷	自然遺跡	縄文・奈良・平安・中世	27	三神裏段丘	绳文(後期・中期)・平安	
12	北園敷	自然遺跡	奈良・平安	28	土手内丘	段丘	绳文・奈良・平安
13	大野田	自然遺跡	縄文(後期)・弥生	29	戸ノ口丘	丘陵	縄文(中期～前中期)・弥生・平安
14	元築山	自然遺跡	奈良・平安	30	二塚古墳	後背湿地	古墳
15	五反田内塙	自然遺跡	山麓	31	春野古墳	段丘	古墳
16	五反田内塙	自然遺跡	古墳	32	金沢沢古墳	段丘	古墳

第8図 周辺の遺跡

2. 調査経過

平成3年3月5日付で、仙台市太白区郡山8丁目11番11号佐藤春男氏より、発掘届が提出されたことにより今回の調査に至った。当地区は、富沢遺跡のなかの北部にあたり、調査対象地区の南側に隣接する地域での以前の調査において水田跡が検出されていたことにより、その範囲確認を目的とする調査を行なった。

3. 調査の方法

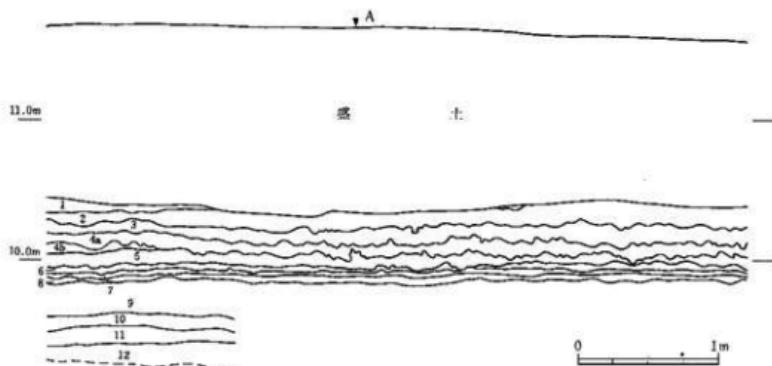
調査区を調査対象地区のほぼ中央に約 $2.6 \times 5\text{m}$ (13m^2) で設定した。調査は、盛土及びその直下の1層中（旧水田耕作土）までを重機によって排除し、以下は人力で行った。8層上面までは、調査区全域の精査を実施し、8層以下は南側に深掘区を設定し掘下げた。（12層まで $1.5 \times 3\text{m}$ ）

4. 基本層序

今回の調査では盛土下に大別12層、細別14層が確認された。各層の土質は1層がシルト質粘土で、他は粘土層である。泥炭の形成は5層から以下で顕著になるが、それぞれ進度に差がある。現代のものを除く水田土壤の可能性のある層は、2・3・4a・8層である。3・4a層中から灰白色火山灰が検出されている。3層のものは4層に堆積していたものが後の水田耕作によって巻き上げられたものである。各層はほぼ水平に堆積している。

5. 検出遺構と出土遺物

遺構、遺物ともに検出されなかった。



第9図 基本層序

層序	色	土質	層厚	炭化跡	混入物	層名
1	7.5Y5%	シルト質粘土	2cm~10cm	あり	炭化物・マンガン粒・白色軽石(ø1~2mm)	現代の耕作土
2	7.5Y5%	粘土	4cm~16cm	あり		下部著しく起伏・水田土壤?
3	5Y5%	粘土	4cm~16cm	あり	マンガン粒・白色軽石・4a層ブロック(ø2~3cm)	下部著しく起伏・水田土壤?
4a オリーブ層	5Y5% 黒	粘土	6cm~10cm	なし	白色火山灰ブロック(ø2~5cm)	下部著しく起伏・水田土壤?
4b オリーブ層	5Y5% 黒	泥炭質粘土	2cm~8cm	なし	下部に植物遺体	部分的分布
5	10YR5%	泥炭質粘土	4cm~10cm	なし	植物遺体	泥炭形成著しい
6	5Y5% 黒	粘土	2cm~6cm	なし	植物遺体	泥炭形成著しい
7	5Y5% 黒	泥炭質粘土	2cm~5cm	なし	植物遺体	泥炭形成著しい
8	2.5Y5%	泥炭質粘土	2cm~8cm	なし	植物遺体多量	水田土壤?
9	5Y5% 黒	泥炭質粘土	20cm~21cm	なし	植物遺体多量	泥炭形成著しい
10 オリーブ層	5Y5%	泥炭質粘土	7cm~10cm	なし	植物遺体	
11	2.5Y5%	泥炭質粘土	8cm~12cm	なし	植物遺体多量	
12	5Y5% 黒	泥炭質粘土	18cm以上	なし	植物遺体	

6. まとめ

今回の調査で、遺構・遺物は共に検出されなかったが、プラント・オパール分析の結果から2層・3層・4a層・8層で水田耕作が行われていた可能性が非常に高い。また、5層上部・9層上部でも行われていた可能性が指摘されている。

周辺の調査成果や調査後の検討の結果から、5層・7層・9層がさらに細分される可能性があり、富沢遺跡北部東側の基本層序との対応関係と所属年代は次のとおりである。

- 2層（北部東側基本層序2層） 近世～現代
- 3層（北部東側基本層序3a層） 近世
- 4a層（北部東側基本層序4c層） 平安時代（灰白色火山灰降下以後）
- 5層上（北部東側基本層序7a・7b層）
- 5層下（北部東側基本層序8層）
- 6層（北部東側基本層序9a・9b層） 弥生時代（十三塚式期）
- 8層（北部東側基本層序10b層） 弥生時代（樹形圓式期～十三塚式期以前）
- 9層上（北部東側基本層序11層） 弥生時代（樹形圓式期）

(五十嵐康洋)

参考文献

1991 「富沢・泉崎浦・山口遺跡(3)」 仙台市文化財調査報告書第152集 仙台市教育委員会



写真10 基本層序

仙台市富沢遺跡(第76次調査)におけるプラント・オパール分析

古環境研究所

1. 分析結果

プラント・オパール分析の結果を表1および図1、図2に示す。なお、稻作跡の検証および探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（スキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

2. 考察

(1) 稲作の可能性について

水田跡（稻作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稻作が行われていた可能性が高いと判断している。ただし、富沢遺跡の場合はこれまでの調査の結果、プラント・オパール密度が3,000個/g未満の場合でも水田遺構が検出されていることから、判断の基準となる値を約3,000個/gとした。この判断基準にもとづいて、稻作の可能性について検討を行った。

第76次調査では、2層～10層について分析を行った。その結果、6層と10層を除く各層からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、2層（水田耕作土？）、3層（水田耕作土？）、5層、8層（水田耕作土？）では、プラント・オパール密度がいずれも5,000個/g前後と高い値である。したがって、これらの層で稻作が行われていた可能性は高いと考えられる。また、4a層（水田耕作土？）でも密度が2,900個/gと比較的高い値であることから、同層で稻作が行われていた可能性が考えられる。その他の層では密度が700～2,200個/gと比較的低い値であることから、稻作の可能性は考えられるものの、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

(2) 古環境の推定

ネザサなどのタケ亜科植物は比較的乾いた土壤条件のところに生育し、ヨシは比較的湿った土壤条件のところに生育している。このことから、両者の出現傾向を比較することによって土層の堆積環境（乾湿）を堆定することができる。

分析の結果、当遺跡ではほとんどの層でタケ亜科よりもヨシ属が優勢となっている（図3）。ヨシ属は特に5層で著しく卓越しており、8層や9層などでも多く見られた。これらのことから、当時の遺跡周辺は、ヨシ属が繁茂するような湿地的な土壤条件で堆積したものと堆定される。なお、これらの層では泥炭（植物遺体層）が形成されているが、その主な給源植物はヨシ属と考えられる。

3. まとめ

以上のように、水田耕作土とみられていた2層、3層、4a層、8層ではいずれもイネのプラント・オバールが高い密度で検出され、これらの層で稻作が行なわれていたことが分析的に検証された。また、5層でも稻作が行なわれていた可能性が高いと判断された。

これらのことから、当調査区では少なくとも8層の時期には稻作が開始されていたものと推定される。その後、6層～7層の時期には稻作は何らかの原因で一時中断されてるが、5層の時期には再開され、おおむね継続して行われて現在に至ったものと推定される。

【参考文献】

- 杉山真二・藤原宏志、1987、川口市赤山陣屋跡におけるプラント・オバール分析、赤山—古環境編—、川口市遺跡調査会報告、第10集、281～298。
- 藤原宏志、1976、プラント・オバール分析法の基礎的研究(1)—数種イネ科栽培植物の珪穀類標本と定量分析法—、考古学と自然科学、9: 15～29。
- 藤原宏志、1979、プラント・オバール分析法の基礎的研究(3)—福岡・板付遺跡(夜白式)水田および群馬・日高遺跡(弥生時代)水田におけるイネ(*O. sativa* L.)生産量の推定—、考古学と自然科学、12: 29～41。
- 藤原宏志・杉山真二、1984、プラント・オバール分析法の基礎的研究(5)—プラント・オバール分析による水田址の探索—、考古学と自然科学、17: 73～85。

表1 プラント・オバール分析結果

仙台市・富沢遺跡

76次地点

試料名	深さ cm	層厚 cm	仮比重	イネ 個/g	(物質量) t/10a	ヨシ属 個/g	タケ類 個/g	ウシクサ族 個/g	キビ族 個/g
2	2	8	1.15	9,000	8.49	700	28,700	700	0
3	10	12	1.03	5,800	7.29	2,200	21,200	1,400	0
4a	22	8	0.73	2,900	1.73	700	14,600	700	0
4b	30	5	0.59	2,200	0.62	3,300	11,100	500	0
5	35	7	0.39	4,600	1.30	29,000	16,800	900	0
6	42	3	0.52	0	0.00	1,600	12,000	0	0
7	45	3	0.29	700	0.06	4,700	10,300	1,500	0
8	48	4	0.43	5,300	0.95	7,100	12,400	0	0
9	52	22	0.41	1,500	1.36	6,200	5,500	700	0
10	74	10	0.53	0	0.00	2,200	22,100	0	0

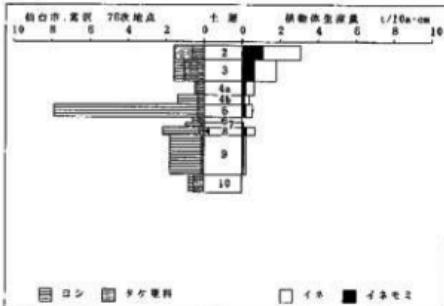
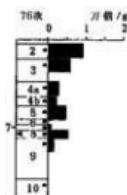


図1 イネのプラント
オバールの検出状況

(注) ◆印は50cmごとのスケール。
+印は分析試料の採取箇所

図2 おもな植物の推定生産量と変遷

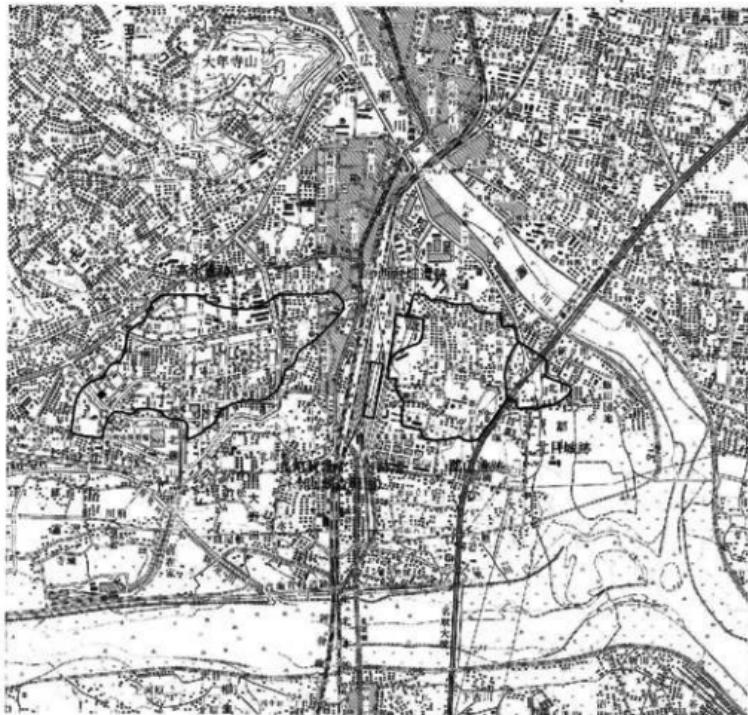
(注) ◆印は50cmごとのスケール

[3] 長町貨物ヤード跡地

1. 位置と環境

長町貨物ヤード跡地は、仙台駅より南へ4kmの東北本線長町駅構内に位置している。北へ1.5kmで広瀬川、南へ1.5kmで名取川、東へ2.2kmで両河川が合流し、6km下って太平洋に注いでいる。北西には奥羽山系から高度を下げながら連なる丘陵の先端が迫り、2kmに大年寺山、(標高120m)を望むことができる。

仙台の市街地の中心部は広瀬川の形成した河岸段丘(上町、中町、下町段丘)上に広がるが、長町一利府構造線と呼ばれる地質構造線を境にして、西側は宮城野海岸平野という沖積平野となっている。その中でも名取川、



第10図 長町貨物ヤード跡地位置図

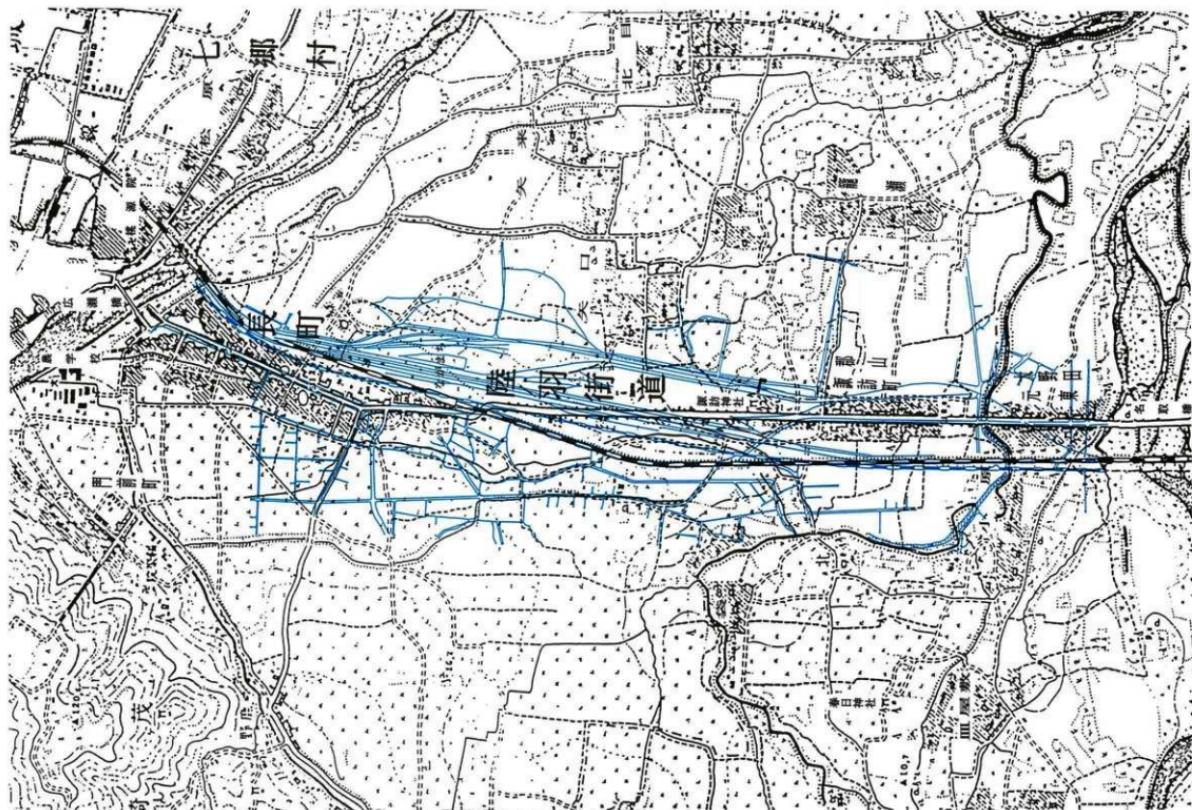
広瀬川に挟まれた範囲は郡山底地と言われ、西半部では自然堤防の背後に後背湿地が広がり、東半部では自然堤防とともに多くの旧河道が観察されている。長町貨物ヤード跡地の敷地内は旧地形を届めないが、周辺では顕著な旧河道が観察される箇所もあり、敷地内に延びていた可能性もある。

周辺の遺跡としては、弥生時代樹形墳式期の遺物や土塙墓が発見された西台畠遺跡、7世紀後半から8世紀初めまでの官衙（＝役所）跡である郡山遺跡などが東に隣接している。また旧石器時代の遺物や樹木などを出土し、弥生時代以降の水田跡を検出している富沢遺跡も北西へ0.5kmと近接している。

特に郡山遺跡については1980（昭和54）年以降、仙台市教育委員会により継続的な調査が行われ、次のようなことが明らかにされてきている。2時期の官衙跡が重複して見つかっており、7世紀後半の古い時期の官衙を「Ⅰ期官衙」、7世紀後半から8世紀初めまでの新しい時期の官衙を「Ⅱ期官衙」としている。Ⅰ期官衙は外郭が明瞭に発見されていないが、南北600m、東西400m以上にわたって広がり、材木列や板塀で区画されたブロックが連なる構成されている。ブロックによっては倉庫群、大規模な建物による官衙の中核群など、機能の違いを窺わせるものもある。建物や塀は北極星を北にした真北より東へ30～40°程ふれた基準により建てられている。Ⅱ期官衙はⅠ期官衙を取り壊した後、同地に造営されている。一辺四町（428m）四方のほぼ正方形に材木列と大溝を巡らして外郭とし、内部に建物を配している。中枢部分では四面廻付建物や石敷広場の他に、地方官衙では唯一の石組池などが発見されている。官衙の周辺にも大規模な建物や、まとまりを持った建物群などがあり、官衙の南方には御藍を有する寺も建てられている。これらの建物や塀は、真北方向を基準に建てられている。そしてⅡ期官衙の廃絶と前後して、多賀城が仙台平野の北端に造営されたようである。官衙の廃絶後、郡山の地は低湿地部分で水田が営まれたことが明らかになってきている。

また戦国時代末期には郡山遺跡の東隣りに北目城があり、周辺に「矢口」、「矢来」、「館ノ内」、「出丸」などの地名が残されている。

長町貨物ヤード跡地は江戸時代の終り1822（文政5）年の絵図によれば、畑地と水田の混在する地となっている。敷地の西側に奥州街道が通り、長町から北目方面へ細い道が延びている。この様相は、明治年間にになって東北線が開通しても変らなかったようである。1918（大正7）年貨物ヤードが着工されると、予定地内にあった源訪神社を東へ移動させ、奥州街道を当時の東北線の線路敷に移し、新たに東北線の新線をヤード建設と合わせて工事したようである。大正14年までには現在と同じ範囲で整備され、長町操車場として機能していたと考えられる。



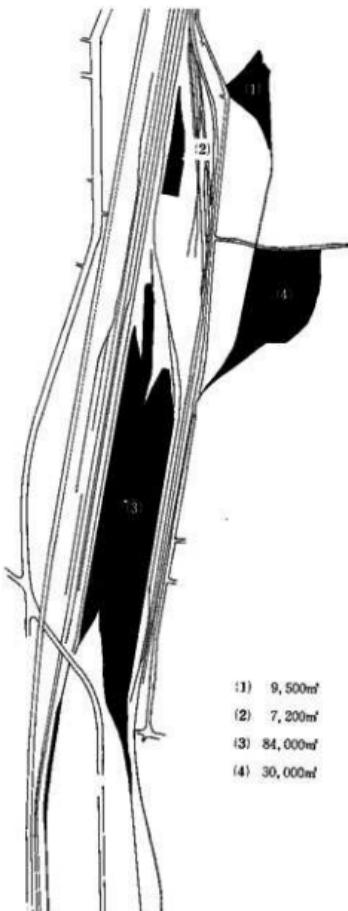
第11図 明治40年頃の長町、都山周辺(青色は現在の長町貨物ヤード跡地周辺)

2. 調査経過

仙台市では長町地区を21世紀に向けた新たな都市拠点を目指す副都心として、「長町地区新都市拠点整備計画」を検討している。この計画では、長町駅西側地区と一体となった副都心の創成、国際ビジネス拠点の形成、新しい文化を創造する交流拠点、国際都市にふさわしい居住空間の提供、歴史と風土を生かした街づくりなどを方針とし、その基盤整備として幹線道路の整備、鉄道の高架化などが必要とされている。

このような地域の中にあって、長町貨物ヤード跡地を含む国鉄清算事業団所有地は約30haの面積があり、整備計画の立案、実施の上で重要な位置を占めている。この地は東に郡山遺跡、西台畠遺跡が隣接しているが、これまで文化財保護法第57条5に定められた遺跡の発見等がされなかった場所である。今後この地域の副都心整備が進められるにおいて、遺跡の存在の有無、範囲の広がりを早急に把握する必要が生じてきた。よって平成2年11月に文化財課、都市整備局区画整理課、国鉄清算事業団の三者により、長町貨物ヤード跡地に立ち入り、現地の観察を行なった。

国鉄清算事業団が所有している土地は、第12図のように4ヶ所に分れている。そのうち(4)地区は既に西台畠遺跡の範囲内にあり、(2)地区は地上に施設が残っているため調査を実施でき



第12図 国鉄清算事業団所有地位置図

ない。現在調査が可能なのは(1)、(3)地区で、そのうち(3)地区は最も面積が広く、郡山遺跡の範囲とも隣接している。この(3)地区のみを対象にしたとしても広大な面積であり、試掘調査による範囲確認だけでも数年を要すると考えられた。従って平成3年度は、今後いかなる試掘調査を実施したらよいのかを検討するため、造構の密度、様相、基本層序などをみる試掘予備調査を(3)地区で実施することにした。しかし国鉄清算事業団と協議した結果、(3)地区の東側を貨物

線、西側を東北本線が通り、それらに関連した埋設ケーブル等が地中に残されているため、安全対策上、3、(1)図13図にあるような範囲に限って調査するよう制約を受けた。平成3年6月「長町駅構内における埋蔵文化財調査に伴う覚書」を仙台市教育委員会と国鉄清算事業団東北支社仙台事務所との間に取り交し、安全柵、異常時連絡体制等の安全対策を施した後、平成3年7月24日から10月16日まで調査を実施した。

今回の調査は1982(昭和56)年よりの国庫補助事業「仙台平野の遺跡群」発掘調査において実施するものであり、仙台平野に残された貴重な遺跡の範囲を確認することを前提としている。これによって得られた成果は、将来の都市開発事業に生かされなければならないことを明記しておく。

3. 調査内容

(1) 調査区の設定

調査区は、調査対象面積のうち、国鉄清算事業団から限定された96m × 420m の範囲内に設定することにした。当初は、調査対象範囲内を囲む形で2m幅の調査区を設定したが、E-1、E-2、E-3、C-4、C-5トレンチを調査した段階で、Ib層が2m近く堆積している調査区が多く、崩落の危険性が高いことや、郡山遺跡と同じ官衙の造構検出面（これ以後單に造構検出面と記載）までかなり深いため、効率的な造構検出作業に支障を来すことから、6m × 6mの方形の調査区に切り換えた。なお、トレンチ番号は、北側より順に設定している。

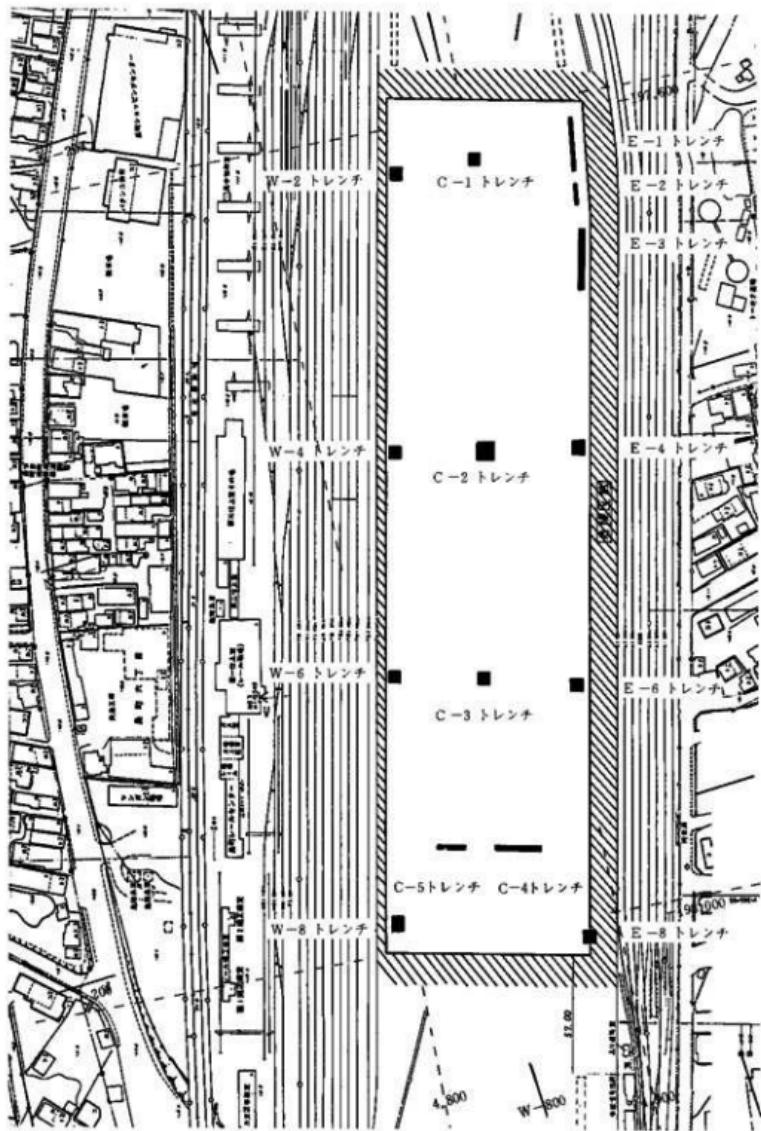
調査対象範囲内の東部は、E-1からE-8トレンチまで設定し、E-5、E-7トレンチ以外を調査した。中央部は、C-1からC-5トレンチまで設定し、全てのトレンチを調査したが、C-2トレンチについては、堅穴住居跡を2軒検出したことや、造構検出面まで比較的浅いことから、9m × 9mの調査区に拡張した。西部は、W-1からW-8トレンチまでを設定し、W-2、W-4、W-6、W-8トレンチを調査した。なお、各トレンチ番号は、東西一直線上に対応するようにした。

調査区の平面図作製並び位置関係の明示については、郡山3丁目地内にある任意の座標原点(X=0、Y=0)を基準として、ヤード内に設置した。なお、将来他遺跡との造構の位置関係の検討のため、国家座標系についても合わせて明示し、対比できるように努めた。

(2) 基本層序

調査範囲が40,000m²に及ぶため、各調査区毎の層位について対応関係や、堆積層の成因について全てを明らかにするのは困難である。しかし大要は把握される部分もあり、以下のように整理した。尚、各調査区の中でのみ存在する層や、対応関係が不明な層についてはアラビア数字で記し、後日への課題とした。

E-1～6、C-2～5、W-2～6トレンチ



第13図 調査区配置図

Ia 層 : 10YR 5/2 灰黄褐色砂。粘性、しまりなし。小石を多量に含む。線路のパラス。

Ib 層 : 7.5YR 5/2 黒色。石灰の燃え滓。

Ic 層 : 10YR 5/2 灰黄褐色シルト質粘土。粘性なし。しまりやや有り。ヤード造成の為の整地層で、各トレンチごとに色調のバラつきがある。

IIa 層 : 10YR 5/2 暗褐色シルト質粘土。粘性、しまりやや有り。ヤード造成以前の旧耕作土(畠地)

IIb 層 : 7.5YR 5/2 褐灰色粘性シルト。粘性有り。しまりなし。ヤード造成以前の旧耕作土(水田)

IIIa 層 : 10YR 5/2 暗褐色シルト質粘土。粘性、しまり有り。E-3 トレンチのみに分布。

IIIb 層 : 10YR 5/2 にぶい黄褐色シルト質粘土。粘性、しまり有り。E-3 トレンチのみに分布。

IVa 層 : 10YR 5/2 黄橙色粘土。粘性、しまり有り。郡山遺跡の宮衙と同時代の遺構検出面と考えられる層(以下、遺構検出面)

IVb 層 : 10YR 5/2 黄褐色シルト質砂。粘性なし。しまりやや有り。C-4 トレンチのみに分布する遺構検出面。

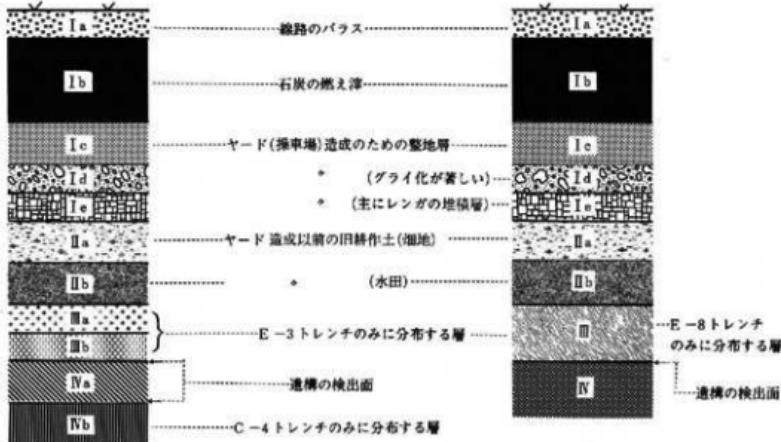
E-8、W-8 トレンチ

III 層 : 10YR 5/2 灰黄褐色粘土。粘性、しまり有り。酸化鉄、小石を含む。E-8 トレンチのみに分布する。旧耕作土水田。

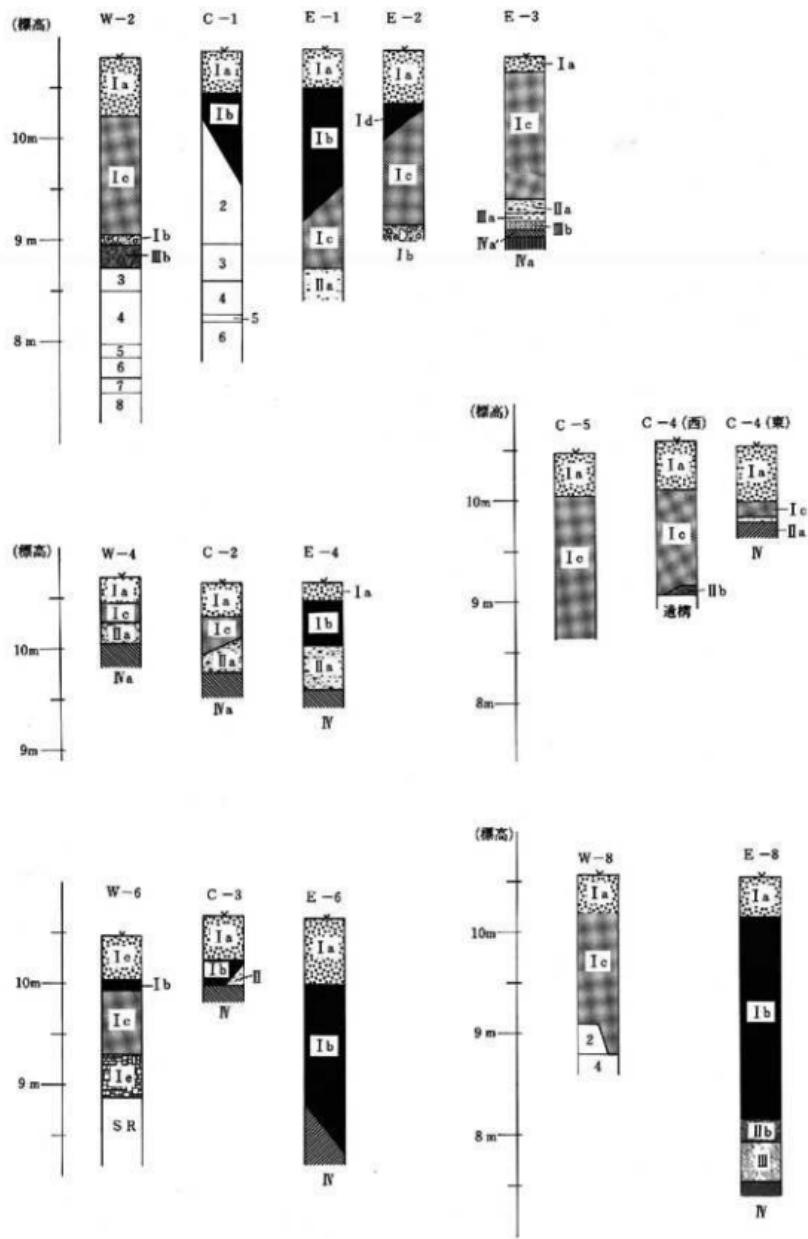
IV 層 : 10YR 5/2 黄橙色粘土。粘性、しまり有り。マンガンを多量に含む。遺構検出面。

E-1~6, C-2~5, W2~6 トレンチ

E-8, W-8 トレンチ



第14図 土層柱状図



第15図 調査区断面柱状図

(3) 検出遺構と出土遺物

15ヶ所の調査区を設定し、遺構の検出までの調査を実施した。遺構を検出できた調査区は、E-3、E-4、E-8、C-2、C-3、C-4、W-4、W-8トレンチにおいてである。E-1、E-2、C-5トレンチでは、Ib層の堆積が厚く、遺構の検出される層まで到達することができなかった。C-1、W-2トレンチでは周辺と層位が違い、遺構を検出することができなかった。E-6トレンチでは、遺構検出面であるIV層が削平されて傾斜しており、遺構は検出できなかった。W-6トレンチでは、河川跡のみを検出している。

以下、遺構を検出した調査区について述べるが、遺構の種類については検出した上面の輪郭によつてのみ判断している。

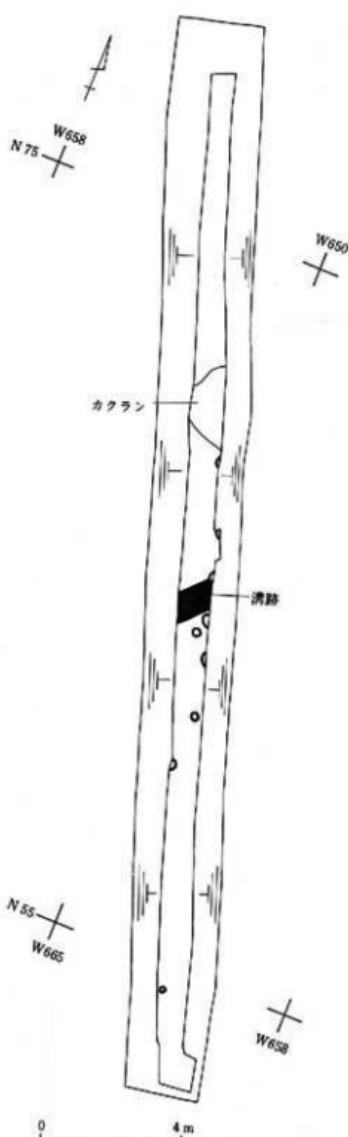
E-3トレンチ

きわめてIc層の堆積が厚く、遺構検出面まではかなり深いが、溝1条、ピットを検出した。溝跡は、調査区のほぼ中央部に位置し、N-47°-W方向に延びている。ピットは溝跡南側に多く分布している。

遺物は、Ic層で土師器片、須恵器片多数、弥生土器B-8鉢(第22図9)、土師器C-5壺(第22図2)、土師器C-3甕(第22図5)などを出土している。IV層上面では、多量の土師器片、須恵器片と、土師器C-4壺(第22図4)などを出土している。

E-4トレンチ

堅穴住居跡2軒などを検出した。調査区内で遺構の一部を検出したのみなので、住居跡の規模等の詳細は知り得ないが、南側の住居跡が北側の住居跡を切っているようである。南側の住居跡は、



第16図 E-3トレンチ平面図

北壁方向でN-60°-Eで、北壁中に焼土、炭化物が集中している箇所がある。ほかに住居跡を切る溝跡が7条程あるが、C-2、3、4トレーンチで検出した小溝状造構とは、方向性にばらつきがあることや堆積土が一定でないことなどから、違う性格のものと考えられる。

遺物は、造構の検出面であるIV層上面より土師器壺、甕、須恵器甕、蓋、壺片、石器K-3磨石、(第22図20)などが出土している。また、上層のIIa層中より須恵器E-4壺底部片、弥生土器B-2～6(第22図15～19)が出土している。

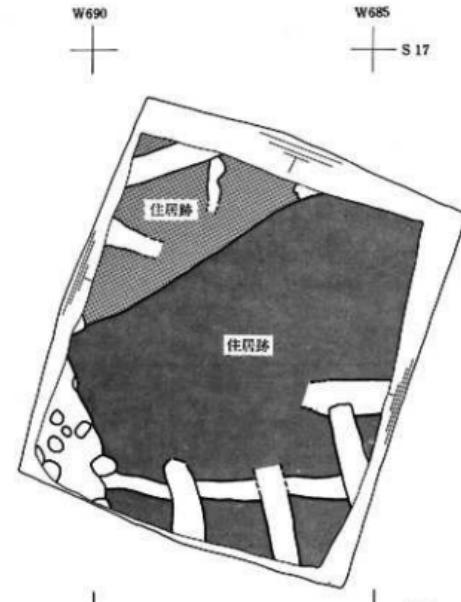
E-8トレーンチ

きわめてIb層の堆積が厚く、1.5m四方の範囲でしか造構を検出することができなかった。溝跡とそれに切られる性格不明の造構を検出した。溝跡は幅0.7m以上で、N-51°-W方向で延び、堆積土の上面にバラスを含んでいる。

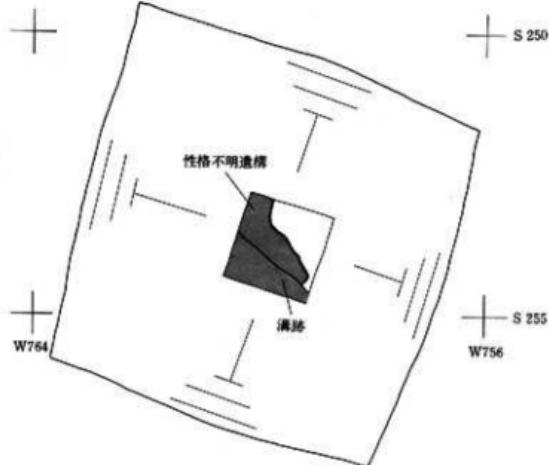
遺物は、II、III層より陶器片が出土したのみである。

C-2トレーンチ

6×6mの調査区を設



第17図 E-4トレーンチ平面図

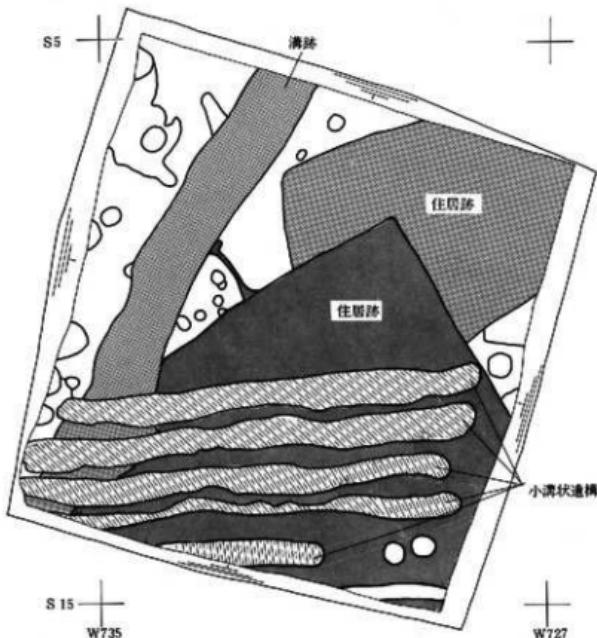


第18図 E-8トレーンチ平面図

定して調査に入ったが、煙道を有する明瞭な堅穴住居跡を検出したことや地表より造構の検出面までの深さが比較的浅いことなどから、調査区を 9×9 m に拡張して調査を行なった。

堅穴住居跡 2 軒、溝跡 1 条、小溝状造構などを検出した。煙道を有する堅穴住居跡は、8 m \times 6 m 以上の規模で、北壁中に長さ1.2m、N-36°-W方向の煙道が延びており、煙道の先端には直径30cmの煙出しのピットが付いている。この住居跡は北側でやや不整形の堅穴住居跡を切り、南北方向の溝跡と小溝状造構に切られている。南北方向に延びる溝跡は、幅1mでやや蛇行はしているもののほぼN-27°-E方向に延びており、上面に灰白火山灰が分布している。小溝状造構は幅0.1~0.6mでW-3°~5°-Sの方向で延びているが、調査区の東端で途切れている。

遺物は、造構検出面のIV層上面より土師器坏、甕片を少量出土している。



第19図 C-2 トレンチ平面図

C-3 トレンチ

堅穴住居跡1軒と小溝状造構などを検出した。堅穴住居跡は、やや不整形ながら3.5m四方程と推定され、西壁でN-13°-Wである。小溝状造構は、幅0.2~0.5mでW-8°~9°-Sの方向で延びている。

遺物は、造構検出面のIV層上面より土師器坏、甕片と少量の須恵器坏、甕、壺片を出土している。

C-4・5 トレンチ

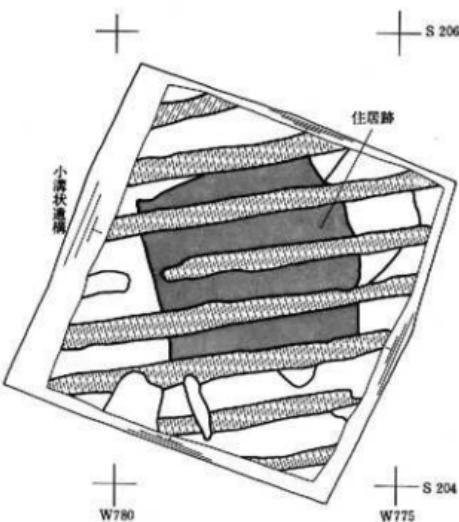
C-4 トレンチからは、小溝状造構、溝跡などを検出し、西端においては水田の存在する可能性もある。

C-4 トレンチは、東から西へ傾斜して除々に低くなっている、22mの範囲で標高差にして1m程変化している。東半の高い部分では、小溝状

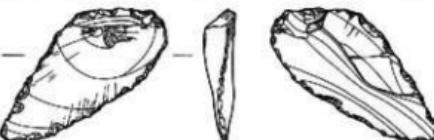
造構が幅0.25~0.6mでW-11°~15°-Sの方向で延びている。西半の低い部分では、溝跡が幅0.32~0.5mでW-13°-Sの方向に延びている。この溝跡は水田の耕作土と極似する粘土層を切っている。またこの粘土層の上面では、珪畔の可能性を示す土層の変化も一部に観察される。

遺物は、造構の検出面であるIV層上面から土師器片が少量出土したのみであるが、上層のIIb層よりは、土師器坏、甕片、須恵器片などが多量に、また石器K-2スクレイパー(第21図)が出土している。

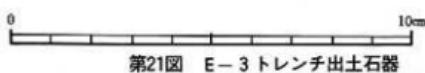
C-5 トレンチでは、IC層の堆積が厚く造構を検出できなかったが、C-4 トレンチの標高の変化から考え、造構の検出面自体がさらに傾斜して低くなっている可能性がある。



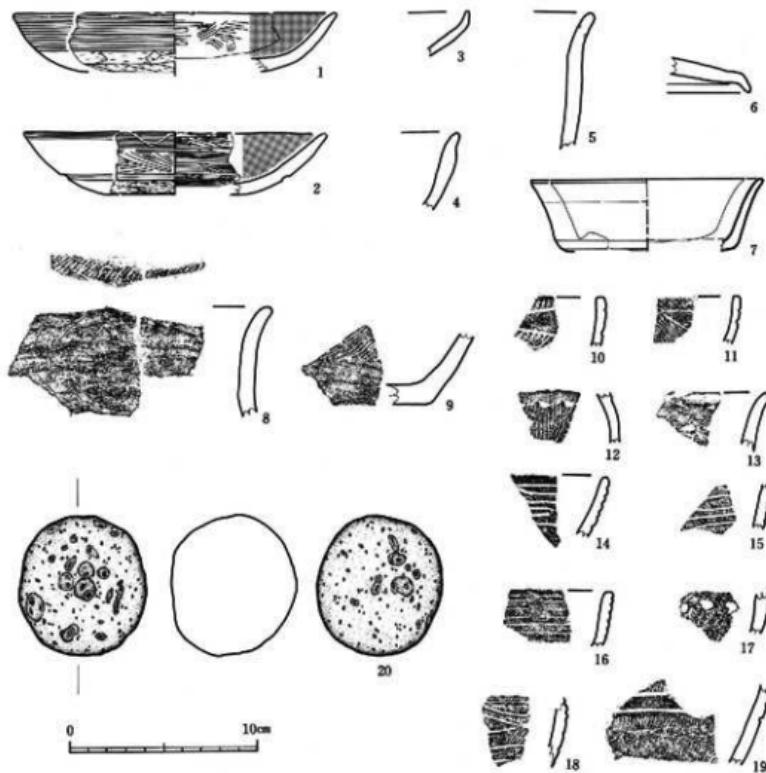
第20図 C-3 トレンチ平面図



石質 珪質真岩
重量 7.5g

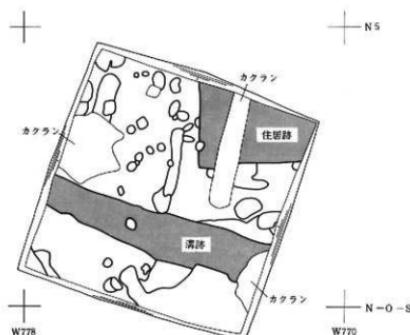


第21図 E-3 トレンチ出土石器

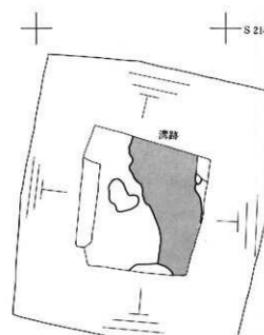


番号	発見場所	種	形態	出土順位	性	説明
1	C-1	土器部	盆	W-4	直a 上面	(外周)口縁→底部ヨコナギ、底部ヘラカズリ (内面)ヘラミガキ→黒色処理
2	C-5	土器部	盆	E-3	直a 背	(外周)口縁部ヨコナギ、底部ヨコナギ→ヘラカズリ (内面)ヘラミガキ、底部ヘラカズリ→ヘラミガキ (内面)ヘラミガキ、内外面黒色処理
3	C-2	土器部	盆	E-4	直a 中	(外周)口縁部ヨコナギ、底部ヘラカズリ (内面)ナデ、一部ヘラミガキ
4	C-4	土器部	盆	E-3	直a 上面	(外周)口縁部ヨコナギ、底部ヘラカズリ→ヘラミガキ (内面)ヘラミガキ、内外面黒色処理
5	C-3	土器部	甕	E-3	直a 中	(外周)口縁部ヨコナギ、底部ヨコナギ (内面)口縁部黒色、底部ヘラナデ
6	E-2	頭部部	董	E-3	直a 中	(外周)ロクロナギ、一部削除ヘラカズリ (内面)ロクロナデ
7	E-1	頭部部	盆	W-4	直a 上面	(外周)ロクロナギ、一部削除ヘラカズリ (内面)ロクロナデ
8	B-7	骨生土器	董	W-4	直a 上面	(外周)ミガキ (内面)LR残文、ミガキ
9	B-8	骨生土器	盆	E-3	直a 背	(外周)し沢構文、ミガキ (内面)ミガキ
10	B-1①	骨生土器	盆	W-4	直a 上面	(外周)LR残文、沈殿、ミガキ (内面)ミガキ
11	B-1②	骨生土器	盆	W-4	直a 上面	(外周)LR残文、沈殿、ミガキ (内面)ミガキ
12	B-1③	骨生土器	盆	W-4	直a 上面	(外周)し沢構文、剥突 (内面)ナデ
13	B-1④	骨生土器	盆	W-4	直a 上面	(外周)し沢構文、剥突 (内面)ミガキ
14	B-1⑤	骨生土器	洗鉢	W-4	直a 上面	(外周)洗鉢 (内面)ミガキ
15	B-6	骨生土器	盆	E-4	直a 中	(外周)LR残文、沈殿、ミガキ (内面)ナデ
16	B-2	骨生土器	盆	E-4	直a 中	(外周)沈殿 (内面)ミガキ
17	B-3	骨生土器	盆	E-4	直a 中	(外周)し沢構文、剥突 (内面)ミガキ
18	B-5	骨生土器	盆	E-4	直a 中	(外周)し沢構文、沈殿 (内面)ミガキ
19	B-4	骨生土器	盆	E-4	直a 中	(外周)し沢構文、沈殿 (内面)ミガキ
20	K-3	石	器石	E-4	直a 中	外表面研磨している

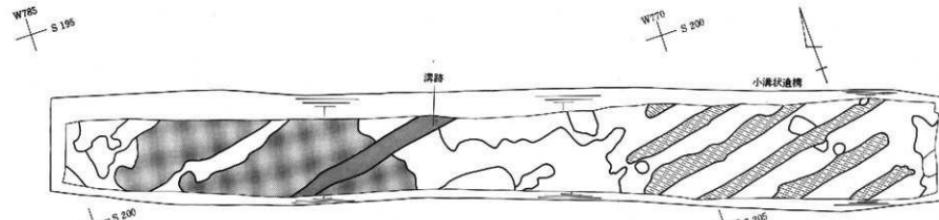
第22図 出土遺物



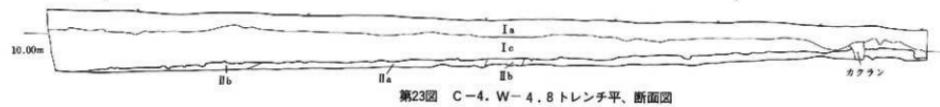
W-4 トレンチ平面図



W-8 トレンチ平面図



C-4 トレンチ
平、断面図



第23図 C-4. W-4, 8 トレンチ平、断面図

W-4 トレンチ

堅穴住居跡1軒、溝跡1条、ピットなどを検出した。堅穴住居跡は、調査区の東北隅で一部を検出したのみであるが、西壁での方向はN-0°-Wで、磁北方向を示している。溝跡は、幅0.8~1.2mでN-69°-W方向に延びている。この調査区は他と比べ、ピットの数が多いようである。

遺物は、遺構検出面であるIVa層上面より土師器C-1壺(第22図1)、須恵器E-1壺(第22図7)、弥生土器B-7壺(第22図8)、弥生土器B-1(第22図10~14)や、土師器、須恵器の小片が多量に出土している。

W-8 トレンチ

溝跡1条、土壙などを検出した。溝跡は、幅1.1~1.7m以上で、蛇行しながらほぼ南北方向に延びている。

遺物は出土しなかった。

4.まとめ

長町貨物ヤード跡地のうち今回調査した地区は、現地表は平坦になっているが、ヤード造成以前の旧地形は水田部分で標高8~9m、畠地部分で9~10mと、比高差にして1~2m程の変化のある地形のようである。旧地形の標高が高く畠地の部分からは、堅穴住居跡などが検出されている。旧地形の標高が低く水田の部分であっても、E-8、W-8トレンチのように溝跡が検出されるところもある。今回の調査では堅穴住居跡6軒、溝跡、小溝状遺構などを検出している。遺構の検出面(IV層上面)やヤードの造成土(Ic層)中からは、須恵器片、主にロクロを使用していない土師器片、弥生土器片などが出土している。遺構を検出したIV層の土層や、上層の堆積状況、出土遺物からみて、郡山遺跡とほぼ同じ状況を示している。ただ違いを見い出すとすれば、郡山遺跡内の遺構はI、II期官衙の方向性に規制されているものが多いが、ここで検出された遺構ではあまりその傾向は見られない。また出土遺物の中でロクロ使用の土師器が少量ながら、郡山遺跡内よりは多いことが上げられる。

今年度の調査は、今後の範囲確認のための試掘調査の方法を検討するために、遺構の密度、様相、基本層序などをみる予備調査であった。遺構の存在や一部ではあるが旧地形の復元が可能になるなど、当初の目的は達したと考えられる。来年度以降の試掘調査については、今回対象にした地区(3.(1)第13図参照)以外は、埋設ケーブルの存在などから調査できる状況にはなっておらず、同じ地区内において具体的な範囲確認調査を実施する予定である。

(長島榮一、稻葉俊一)



写真11
E-3 トレンチ (南より)



写真12
E-3 トレンチ溝跡
(南より)



写真13
E-8 トレンチ (西より)

写真14
C-2 トレンチ(北より)



写真15
C-3 トレンチ(西より)



写真16
C-4 トレンチ(東より)



写真17
C-4 トレンチ
(北西より)



写真18
W-4 トレンチ
(北より)



写真19
W-8 トレンチ
(西より)



〔4〕郡山遺跡

1. 位置と環境

郡山遺跡は仙台市太白区郡山の地に位置し、東西800m、南北900mの72万m²に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100~200mの丘陵が迫り、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。新しい時期（Ⅱ期官衙）と古い時期（Ⅰ期官衙）の2時期の官衙が同地にあったこと。Ⅱ期官衙は造営基準方向が真北から30~40° ふれており、外郭施設は未だ不明瞭であるが内部には宮舎や倉が集中していたこと。Ⅱ期官衙は造営基準方向が真北方向をとり、四町（428m）四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廻付建物の他に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。Ⅱ期官衙南側には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とⅡ期官衙の間には、四面廻付建物をはじめ大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半代から8世紀初めまで、官衙の機能が終了することなどである。

2. 調査概要

郡山遺跡の発掘調査の詳細については、仙台市文化財報告書第161集「郡山遺跡 XII－平成3年度発掘調査概報」に記述し、本報告では概要を載せるのにとどめる。

(1) 第90次調査

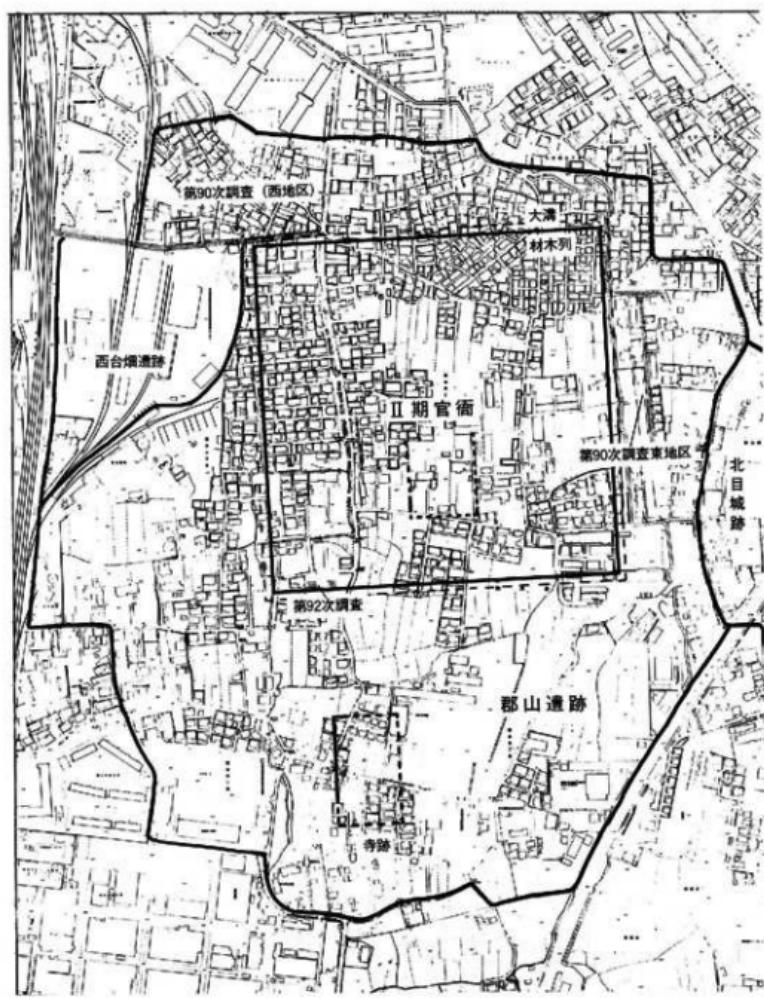
調査区は、郡山1丁目地内（西地区）と郡山4丁目地内（東地区）に分かれている。西地区は西台畠遺跡の北辺から郡山遺跡Ⅱ期官衙の外郭北辺大溝上の長さ314m、東地区はⅡ期官衙外郭東辺外側の長さ329mである。調査は水道管工事の埋設時に、管理設のための幅80cmの帯掘り断面を観察することに限られたため、遺構の詳細までは明らかにできなかった。

西地区でSI 1349、SI 1350、SI 1351堅穴住居跡、東地区でSI 1348堅穴住居跡、SD 1354溝跡などを検出した。そのうちSI 1348堅穴住居跡からは、カマド付近よりロクロを使用していない土師器C-701壺とロクロを使用した土師器壺片が伴に出土した。東地区のⅡ期官衙外郭大溝の推定位置からは、大溝の堆積土に類似した層を検出したが、擾乱が著しいため大溝と断定はしなかった。

(2) 第92次調査

調査区はⅡ期官衙内の東南部にあたり、外郭南辺材木列に隣接する地区で、昭和55年度に調査した第4次調査の北に位置する。調査対象地区は既に宅地化しており、かなりの盛上がりがなされていた。遺構検出面までの土層観察を目的に調査を行い、80~100cmの盛土下層に黄褐色粘土質シルトの官衙遺構検出面を確認した。

（木村浩二、長島榮一）



第24図 郡山遺跡調査区位置図

文化財課職員録

課長 早坂 春一

管理課		調査第一係				調査第二係	
係長	鶴田 義幸	係長	加藤 正範	係長	田中 則和		
主事	白幡 靖子	主任	熊谷 幹男	教諭	太田 昭夫		
タ	佐藤 正幸	教諭	佐藤 好一	主事	金森 安孝		
タ	高橋 三也	主任	篠原 信彦	タ	佐藤 甲二		
タ	庄司 厚	タ	木村 浩二	タ	渡部 弘美		
		主事	佐藤 洋	タ	工藤 哲司		
		タ	吉岡 恒平	タ	斎野 栄彦		
		教諭	小川 淳一	タ	工藤信一郎		
		主事	主浜 光朗	タ	荒井 格		
		タ	長島 葦一	タ	中富 洋		
		教諭	神成 浩志	タ	平間 亮輔		
		タ	高倉 拓一	教諭	五十嵐康洋		
		タ	稲葉 優一	タ	川名 秀一		
		タ	菅原 裕樹				
		主事	佐藤 淳				
		タ	渡部 紀				
		タ	大江美智代				
		教諭	熊谷 栄行				

「仙台平野の遺跡群」発掘調査報告書刊行目録

- 第37集 仙台平野の遺跡群I－昭和56年度発掘調査報告書－(昭和57年3月)
- 第47集 仙台平野の遺跡群II－昭和57年度発掘調査報告書－(昭和58年3月)
- 第65集 仙台平野の遺跡群III－昭和58年度発掘調査報告書－(昭和59年3月)
- 第75集 仙台平野の遺跡群IV－昭和59年度発掘調査報告書－(昭和60年3月)
- 第87集 仙台平野の遺跡群V－昭和60年度発掘調査報告書－(昭和61年3月)
- 第97集 仙台平野の遺跡群VI－昭和61年度発掘調査報告書－(昭和62年3月)
- 第111集 仙台平野の遺跡群VII－昭和62年度発掘調査報告書－(昭和63年3月)
- 第125集 仙台平野の遺跡群VIII－昭和63年度発掘調査報告書－(平成元年3月)
- 第134集 仙台平野の遺跡群IX－平成元年度発掘調査報告書－(平成2年3月)
- 第147集 仙台平野の遺跡群X－平成2年度発掘調査報告書－(平成3年3月)
- 第162集 仙台平野の遺跡群XI－平成3年度発掘調査報告書－(平成4年3月)

仙台市文化財調査報告書第162集

仙台平野の遺跡群 XI

平成 4 年 3 月

発行 仙 台 市 教 育 委 員 会
仙台市青葉区国分町 3-7-1
仙台市教育委員会文化財課

印刷 ~~株~~ 東 北 プ リ ン ト
仙台市青葉区立町24-24 TEL 263-1166

